

様式 1

完了報告書（平成 25 年度）

提出者 Albeker András (アルベケル・アンドラーシ)

提出年月日 2014 年 3 月 29 日

【プロジェクト名】

和文 明治期の国語—速記資料を中心に—

英文 Japanese Language of the Meiji Era - Focusing on the Stenographic Materials

【メンバー構成】

研究代表者 Albeker András (アルベケル・アンドラーシ)

幹事 同上

メンバー 同上

【研究のねらいと目的】 (600 字程度)

日本に於ける速記法は明治 15 年（1882）に田鎖綱紀により案出され翌年にその実用化が始まった。以降、演説、講談落語、議事録などの書き取りが行われるようになり、速記の利用が盛んになった。速記は言文一致運動と言文一致体の成立に影響を与えたとされているが、速記資料の研究がまだ不十分の様である。その理由として資料の数の龐大さと速記法に関する諸問題が挙げられる。本研究で、明治の一学術雑誌を通して、演説速記が始まった明治 17 年から明治 27 年にかけて雑誌に於ける文体変遷の一端を文末表現を中心に捉えようとする。また、当時の速記に於ける動詞符号・省画符号の使用や新聞・雑誌に掲載された演説と実地例として速記入門書に載せられたその速記原稿の間にどの程度異同があるかに就いても調査する。

【活動の記録】

2013 年 12 月 7 日 平成 25 年度京都大学国文学会にて発表。発表題：「明治期の講演速記」

【成果の概要】（800 字程度）

① 速記資料の成立問題

速記原文とその雑誌掲載文の比較を行った。両者の間の異同が以下の二点によって生じると考えられる。

- ・速記法の性質：複数の語形を同一記号で表記した例があるため、語形の揺れがありうると考えられる。
- ・速記原文の反訳・整文作業：速記を普通の文字に訳した際、文章の修正加筆により異同が生じたと考えられる。

よって、速記資料が「話のまま」ではないということが確認できた。

② 講演速記における文末表現の傾向

文末表現の調査資料としたのは『東洋学芸雑誌』である。サンプルとして講演・演説速記を 21 本取り、その中から文末表現を合計 3375 例採取した。採取した文末を整理し、常体と敬体に分けて考察した。

常体では明治 17・18 年には「デアル類」の数が少なく、主に否定形で使われている一方、「ナリ」「アリ」「ベシ」などといった文語調の文末表現の用例が多く見られる。しかし、明治 21 年以降「ナリ」等が殆ど現れず、代表的な文末として「デアル類」が台頭してくるようになった。

敬体では「デアリマス類」と「デス類」が代表的な文末表現であるが、「デス類」の活用形は「デス」に偏り、「デシタ」「デショウ」の用例が限られているということが明らかになった。

【研究業績】

2013 年 12 月 7 日 平成 25 年度京都大学国文学会にて発表。発表題：「明治期の講演速記」
発表要旨は『京都大学国文学論叢第 31 号』に掲載予定。

【通信欄】